
序

本書の前身（金芳堂 編「対照カルテ用語」）の初版は1961年に刊行された。そもその構想は医学部在学中に難解な専門用語が次々に出てくるので、用語と知識の整理にこのような本があれば便利だろう、と考えたことに始まる。副題も「和・英・独・ラ」と欲張っていた。多くの医学生、医師に好評を博し望外の喜びであった。その最たるものは、在米邦人の書棚で本書に遭遇したことであった。以降、再三改訂を行ってきたが、若干の類書はあるものの本書を超えるものはなかったと自負している。

今般、株式会社 医薬ジャーナル社から本書再出版の意向を受け、旧版刊行先の金芳堂の了解も得た。この機会にかねてより考えていたように、英語以外は除き、新規に医療周辺領域の諸学（看護、介護、薬局、リハビリテーションなど独立した章を新設）の用語も収録するなど大幅な改訂を加えた。医療に携わる全ての職種の方を対象に、いわば新刊書籍のつもりで仕上げたのが本書「医療スタッフのための現代カルテ用語」である。

何故、いまカルテ用語なのかと思われる向きもあろう。先ず医療が置かれる環境が一変した。少子高齢化時代となり、以前に比べて高リスク対象と見なされていた年齢層の人口が大幅に増えた。それに伴い介護保険の導入、在宅医療まで医療周辺が広がっている。一方で医療事故や紛争も増え、医療への監視の目も厳しくなった。また医療制度も変化し、臨床研修義務化、各種認定医や専門医・指導医制の制定、薬学も6年制へ変ったし、医学教育でも早期の臨床系科目導入の方向がますます強まった。医療の中身もたとえば、EBM（evidence based medicine）、クリニカルパス、地域医療や、主要疾患では診療ガイドライン重視などに傾きつつある。

臨床の現場でこのような時代にカルテはどうあるべきか、大学病院から市中病院へ転じ、私なりに気がついたことがある。一つは看護、リハビリテーション、薬局、介護などの多様な職種が相互に役割分担し有機的に協力して、はじめて総合的な医療が具現できることを実感した。次に電子媒体を使ったカルテが普及し、一患者一カルテが普通になり、他診療科、コメディカルの複数の職種の間で

カルテ情報が共有される。そのためにも、正確な記録が要求される。また、電子カルテの時代には診療録は事実上の公開に等しいと言えよう。

このように様々な意味で、所見を正確に把握し、評価も含めてカルテを正確に書くことは医療の原点と言える。つまるところは、如何にして全身と局所所見とを総合的に把握し、適切な評価をカルテに記録するかである。言語は日英いずれにも拘泥しないが、妥当な用語の使用が必須となる。本書では、外国語は英語のみとしているが、フランス語やラテン語などで英語化した表現はもちろん活かしている。本書の最大の特徴は、カルテ記載時の参考になるよう、系統的に字句を配列している点である。その意味でも第1章の病歴、第2章の現症は診察の手順を踏んで用語を配列しているので、是非、参考にしてもらいたい。内科系諸学は近年、臓器別に診療科が細分化し、自分の専門臓器・専門組織系統しか診察しない、いわゆる縦割り制の弊害が見受けられる。人間は本来、全ての臓器・組織を備えているので、少なくとも内科系診療科にあっては、初診患者では病歴聴取の際に system review を行うなり、全身の一通りの診察なりはするべきであろう。

当然ながら、最新の話題、例えば iPS 細胞、再生医療、分子・遺伝子・遺伝子制御、標的治療薬、遺伝子治療や、身近な例では、家庭医、日常的疾患、治験、機関内倫理委員会、診断群別包括支払方式、費用対効果分析などの用語も適宜収録している。また、最終章「雑」では形、大きさ、色などの表現にも留意した。

診療の合間にこれまでコツコツと貯めてきたメモ、ファイル類を今一度整理し直し、単行本化するのに丸3年かかった。日本医学会はじめ各種学会の用語集などの収録から逆算すると、その何倍かはかかったであろう。この仕事に着手するたびに、視力の衰えを痛感するので、心血を注いだのは少なくとも数年は下らない。私の臨床医としての50有余年の足跡と重なるように歩んできた本書が、装いと内容ともに一新し世に出る。ここに序文をしたための日を迎え、感慨が去来するのを覚える。

末尾になったが、株式会社 医薬ジャーナル社の沼田 稔 会長、岩見昌和 東京総局長、編集部編集一課の南 晃、木村美穂の諸氏に敬意を表したい。

2014年8月

吉田 彌太郎